HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	理想と現実
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 82
Issue Date	1935-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77690
Type	article
File Information	A010_08P16-18.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文苑

理想と現實

甚亭

（一）

「みんな何もかも神様が造つたのかパーパーもか。」

この頃、伸は幼稚園でしきりに神様の話しを聞いて來るらしい。それに妻も最近ではかゝさず日曜に教會に行く樣になつたので、伸は何かにつけて神樣をひつぱり出す樣になつた。杉村も小供に丈は是非神を說く事が必要であると思つて居たから、彼も伸の此傾向はよろこんで見て居た。

「さうだよ」

と彼が答へると伸は無造さにきゝおへない中に

「マヽちやんもか」

「さうだよ。」

「實ちやんもか」

「さうだよ」

「ねーやもか」

「さうだよ」

伸は少し考へた。

「それでは長吉さんもか」

「さうだよ」

「長吉さんなんか造らなければいゝのに。可愛さうに。」

杉村は思はずふき出した。長吉さんとは近所に住んで居るレプラにかゝつて顏の道具が皆たゞれ落ちて居る人の事である。彼がふき出したのを見て、伸は何かそこにある秘密でもさぐる樣に

「なぜ神樣はあんなきたない人を造つたのか。神樣はうんと〳〵偉い人だのに。」

彼はつとめて笑ふまいとした。彼の人間愛が彼の此そこつをいましめたからである。

「さう、なぜ造つたのかねエ」

「ウム分つた。神樣がきつと作りそこなつたんだよ」

杉村は制しきれないで又ふき出した。そして又おそろしい苛責を感じた。

「さうかも知れん。パーパーは忙がしいからあつち行つて丁戴」

さう云ふ時には彼はもう少しも笑つて居なかつた。

（二）

或る日杉村は勤め先で少し仕事があつたので夕方近く家に歸つた。途中彼が町に出る道に來た時、下駄の齒入屋が拵いて居る樣な車に人が乘つてそれを小供が二人押して來るのを遠くから見た。その車といふのはビール箱に車を四つつけたにすぎないものである近くになつて見るとその車上の人は手拭で顏を覆ひかぶして居る。そして見るからにボロ〳〵したボロをまとつて居た。小供達はと見るとその一人は善造である。善造とは長吉さんの小供である。今一人の小供は善造の妹である。杉村が善造の顏を靜かに見入つた時彼はふと善造の眼に異樣の光を見出した。恥ぢ恐れ且つ泣いて居る全身の血が其二つの眼に集つて居るかに見へた彼は愕然として橫を向いた。

「さうだ、長吉さんは今から乞食に行くのだ」

と彼が覺つた時彼は思はず顏をたれた。そして色々の事を想像した。乞食して居る場面、其の闇に近所の人々の目をぬすんで乞食に出掛けて行く時の場面。

彼は家に歸るや、さも大事件の樣に服も着かへない內に妻に云つた。

「長吉さんは乞食に行くんだよ」

「どうして」

「今見たよ、出掛けて行く所を」

「へえゝ、氣の毒ですね。此節だから食へないんでせう。」

二人はしばらく無言で立つて居た

（三）

女中が去年の夏、腸チブスをした時役場からかゝりの役人や巡査が來た。病人車の來るのが少し手まどつたのでそれ等の人々は、玄關に腰を下して色々の無駄話をした。その時何でも傳染病の話から話しがレプラの話にうつつたのであらう。

「此のすぐうしろにもレプラが居ますよ」

役人が云つた。それは長吉さんの事である。杉村は今まで妻や叔母が長吉さんはレプラであらうと云ふのを聞いても出來る丈それを打ちけす樣にして居た。彼は何でも行きつまるまで物を善い方に考へたがる癖を持つて居る。然し今役場の衞生がかりからさうだと聞いては、もう疑ふ餘地を見出す事は出來なくなつた。そして數日前伸と善造とを遊ばす事について妻と爭つた事を思ひ出した

其後何日か經つてから

「長吉さんはやつぱりレプラだからうだから善造と伸と遊ばしてはならぬねエ。隨分危險だ」と云ふと妻は「そうれごらんなさい。あなたの云ふ事はいつもこうですよ」と云つたそして早速伸を呼びつけて云つた。

「これから善造さんと遊んではいけないよ」妻が云つた。

「ウム。パー〳〵遊んでいけないの」

「ウム。」

「何故いけないの」

杉村は妻と顏を見合はした。伸は

二人がまこついて居るのを見て反つて興味を感じたのか又云つた。

「何故いけないの」

「善造さんはご病氣して居るからうつるんだ」杉村が云つた。

「さうか」

「でも善造さんと遊ばないと人に云つてはいけないよ」妻が云つた。

「なぜ」

「善造さんが可愛さうぢやないかそんな事云はれたら」

杉村は頼むようにさう云つた。

(四)

「長吉さんが愈々大阪のレプラの療養所にやられるんですつて。きつき組總代の福岡さんと竹ちやんのお父さんが來て町内から五圓餞別にやるから一戸あたり四拾錢ばかりですが四拾錢出せない家があるから七八拾錢出してくれる樣につて頼みに來ました。壹圓位出してもらいたい風でしたが八十錢しか無かつたから八拾錢やりました。」

「壹圓何とかしてやればよかつたのに。俺はくだらない寄附には一文出すのも惜しいが、こんな場合には出せる丈出したいんだ。」

「でもなかつたんですもの」

「かあいさうにねエ、長吉さんは家族中皆行くのか。」

「長吉さん一人ですつて。行くのはいやだと云つてるんださうです。小供達がかあいさうですつて。でも長吉さんが行けば小供達は肩味が反つて廣くなりませうよ。でも近所の小供達は善造と平氣で遊んでますねエ。こわくないのかしら。善造の姉に富田さんなんか小供をおんぶさして居ますよ。それでも福岡さんなんかさつきさう云つてましたよ『私なんか情がないのか長吉さんの家の前通る時にはいつも反對側を見て行く』んですつて。」

「悲痛だねエ。こんな苦しい生別もあまりないもんだらう。やつぱり親には別れたくないと云つてるんだらうねエ。」

「さうですつて。あのお神さんも偉いですねエ。長吉さんがあんなになり出した時親里から歸れと云つて來ても子供が氣の毒だからと云つて歸らなかつたんださうですからねエそれに稼ぐのもおかみさん一人ですよ。よく今までもやつて來たもんですねエ。」

(五)

天長節の日(四月二十九日)式から歸つてから寫眞屋をよんで家族中で寫眞をとつた。十二時半頃來る樣に寫眞屋に電話かけたので午飯を早くすまし十二時過ぎたら皆盛裝しはじめた。杉村はさつき式から歸つて餘り窮屈なのでモーニングの上着丈脫いで居たが、子供達をせきたてる爲に復自分も上着をつけた。そして妻が鏡臺の前で裾模樣の着物を着てどの帶が色合が一番よく調和するかと相談したので、中の間のテーブルによりかゝつて煙草のみながらそれをながめて居た。子供達も皆一張羅を着込んで居間から中の間座敷書齋の唐紙を皆あけつひろげてはしりまわつて居た。その時玄關で妙な聲が聞えたやうでもありさうでないやうでもある。姑くぢつとして居ると又今度はやゝ明瞭に誰か呼んで居る聲がする。杉村が中の間と玄間との間の唐紙をあけると、横玄關の敷居の上に顔をおしつけておがむ樣にして居る長吉さんが居た。

「今日大阪の療養所へ行く樣になりまして」

と云ふ所まで聞えたがあとはどんな事を云つたか杉村は自分自身が無我夢中になつてうろたへて居たので聞きたくわなかつた。餞別のお禮も云つて居た樣であつた。然し勿論杉村があわてゝ居たからでもあるが、長吉さんの聲も病的で明瞭でなかつた。それに彼自身も半ば泣くかの如く半ば訴へるが如く殆どつぶやく樣な話しぶりでもあつた。杉村は夢中に「あゝさうですか、どうも御丁寧にありがたう。」と同じ事を只くりかへしては返事した。長吉さんはその時丁度道傍の乞食が顔を地にすりつけて兩の手を前につき出して物を乞ふ時の樣に二本の不完全な妙な手を疊の上になげ出して顔をその手の間にはさんでおじぎしては物を云つて居た。

杉村があの時夢中になつたのは、長吉さんに對する憐憫の情からではたしかになかつた。杉村は最初此異樣な怪物の樣な顔をした珍客を見た時、憐れみの心などはとても起し得ず恐らく只恐ろしさ汚なさのみを感じて早く自分の視野からそれが去る事をのぞんだのである。杉村は金が欲しければ後でやるから早く歸つてくれとでも願ふ樣な氣持ちであつた杉村は恐らく二分間もつらかつた此對面を、一時間も長い樣な氣持ちがして居た。長吉さんが何とかくりかへて挨拶するのをどんなにもどかしく思つた事か。杉村は情けある言葉を夢に言葉丈でもかける餘裕がなかつた。

長吉さんが歸ると居間にかけ込む樣に走り込んで鏡臺の前に姿見をして居た妻に

「長吉さんが來た〳〵。消毒藥消毒藥。石炭酸を石炭酸を」

と呼んだ。妻も殆ど機械的に石炭

酸の瓶を棚から下して臺所に行きバケツの中で水に割り、ぞうきんをもつて玄關にやつて來た。

「こゝだ。此邊からこんの邊までこの邊まで手をつき出して居た。この邊は呼吸を一番ふきつけて居たのだ。」

「こつちにくるぢやないつたら」

子供達は何がどうしてきたないのかわからず叱られれば反つてあわてたのか長作さんの指が置かれたあたりをふんだ。

「馬鹿ツ。馬鹿ツ。」

杉村は子供をひきづり倒して思はずなぐりつけた。

「伸の足をふけ。早くそして今仲がかう云ふ風に歩いたからこゝもふけ。」

妻は命ぜられるまゝに又その邊もふいた。

一瞬の後自分自身の態度を直視し始めた杉村は電撃を受けた様に深い哀愁におそはれた。

御嶽登山 (二)

石丸、板垣、森重

「御苦勞さんです」

女の兒一人連れた夫婦が强力を雇つて登つて行くのに出會つた。

「御苦勞さんです」早速聞き覺えた御山言葉で應答する。彼等は多分信者か何かであらう。

シン谷を渡つて漸く勾配のきつくなつた坂を登り詰めると木の洞から人氣者の栗鼠が一匹けろりとした顏を出したが、珍らしい外來者の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて急に又穴の中へ隱れて始末つた。峯傳ひに暫らく進むと「どう」と雷の様な音を連續させて溪流が咆哮して居る。

つい數歩前を見上げると白簾が懸つて居る。材木ノ瀧と云ふ、高さ九間、中頃少し左に折れた所に無限の嬌態を呈し鏘々と落下する音は宛ら一曲の琴聲を聞く様である。

山の背一つ越して兵衞谷に出ると溫泉地帶の雰圍氣に包まれて行くのを意識した。道の兩側には硫黄線がチヨロ〳〵流れ谷川には焦げ茶色の石が累々と重なつて居る。其の間を青藍色の溪流が滔々と流れ、恰もそれにもてあそばされて居るかの如く半ばを失した一本の丸木橋が見るから危げに懸つて居る。

「さてどうして渡河しやう」一同の面には困惑の色が浮んだ。

「俺が一つ渡つて見よう。斯んな事になれて居るから」

森重君が先鋒を承はる事になつた

「おい森重、大丈夫か」

「OK、大丈夫だ」

丸太橋の向ふ際まで歩んで行つた彼が橋の支柱に傳つて河岸へ降りんとした瞬間、足を滑らせてあはや河中へ！

「アツ！」と思つた瞬間彼は見事體をターンして河原へ飛び降りた。

「ナローエスケイプ！」

その拍子に金剛杖は溪流へ、おゝ幸なる哉その杖も亦二米許り流れて岩壁に吸ひ寄せられ、再び彼の手中に握ることが出來た。

「オールセイフ、サンクゴツド」

三人は山の靈に對して心から感謝の意を表した。

「前車の覆るは後車の戒め」とか僕と板垣君の二人は用心して無事向ふ側に渡ることが出來た。

この河原で記念撮影をなし再び山を攀じだら〳〵坂を上り詰め暫らく進むと前方にさゝやかな旅館がハリギリの林越しに見える。

「やー」

『見えた〳〵よ

ハリギリ越しに

二階造りのオハラハラ湯が見えた

ヨイ〳〵ヨイヤサト』

元氣附いた我等は僞小原節を高唱しつゝ旅屋の戸を叩く、時に四時。

奥から老媼が出て來て

「お早うお着きになりましたのうしお疲れたろのうし、どうぞお二階へお上りなさい」

思つたよりずつと樂な行軍を續けて來た我等も、やつと目的地に着いたと思ふと張り切つた氣も弛んでゲートル解く手もだるみ勝なのを如何ともする事が出來なかつた。

二階に座を取つて溫泉湯に浸り旅の疲れを醫し、浴衣に打ち寛いで欄干にもたれ暫し四方の景に見入る。

前方は濁河川の上流、雪を粹いて流るゝ谷川の響は仙峽に木魂まし、其れが樹々や岩の疎密の加減で或は强く或は弱く同じ曲を奏でて居る、巖に激する凄じい響は其處ら邊りの青葉若葉も搖ぐばかりの勇ましさ、漱石の「あら瀑や滿山の若葉皆振ふ」と云ふ句を聯想する。

斯くて大自然の懷に抱かれて壯美の快を恣まゝにしながら夕餉の膳に向ふ。簡素な味噌汁を啜つて居ると側の老媼

「こちらは山奥のことゝて人樣にお上げする立派な御馳走も出來ませんで」

「いや、なか〳〵結構です……」

「皆樣はどちらからお出ぞのうし」

「岐阜からやつて參りました」

「ほんとにまあ、おえらかつたのうし、私共もつい一週間ばかり前こち